

すると雄治は息子の顔を見て口をへの字にし、ゆらゆらと頭を振った。

「やっぱりお前は何も分かってない。確かに手紙からは産みたいという気持ちがヒシヒシと伝わってくる。しかし大事なのは、気持ちと用意は別だってことだ。もしかしたらこの人は、産みたいと強く思いつつも、墮ろすしかない頭では分かっている、その決心を固めたくて手紙を書いたのかもしれない。だとしたら、産みなさいなんて書いたら、全くの逆効果だ。余計に苦しめることになる」

貴之は指先でこめかみを押した。頭が痛くなってきた。

「俺なら、勝手にしろと書くな」

「心配せんでも、誰もお前には回答を求めとらん。とにかくこの文面から、相談者の心理を読まなきゃならんのだ」雄治は再び腕組みをした。

大変だな、と貴之は他人事ながら思う。だがこうして回答を考えるのが、雄治にとっては何よりも楽しいのだろう。それだけに用件を切り出しにくかった。貴之が今夜ここへ来たのは、単に老いた父親の様子を見るためだけではないのだ。

「親父、ちょっといいかな。俺からも話があるんだけど」

「何だ。見ればわかると思うが、今、忙しんだ」

「そんなに時間は取らせないよ。それに、忙しいと言ったって、ただ考え込んでるだけじゃないか。少し違うことを考えた方が、良い案が浮かぶかもしれないぜ」

それもそうだとでも思ったのか、雄治が仏頂面を息子に向けた。

「一体、何だ」

貴之は背筋^{せすじ}を伸ばした。

「姉貴^{あねき}から聞いた。店の方、かなり悪いみたいだな」

途端に雄治は顔^{しか}を顰めた。「頼子^{よりこ}のやつ、余計なことを」

「心配して知らせてくれたんだ。娘なんだから当然だろ」

頼子は昔、税理士^{せいりし}事務所^{じむしょ}に勤めていた。その時の経験^いを生かし、『ナミヤ雑貨店』の確定申告^{しんこく}を、全て彼女が処理しているのだ。ところが先日、今年の分を済ませた彼女が、貴之に電話をかけてきた。

「ひどいわよ、うちの店。赤字なんてもんじゃない。真っ赤^{まっか}っか。あれじゃあ誰が確定申告しても同じよ。節税対策^{せつぜい}なんて必要ない。正直に申告しても、税金なんて一銭も払わなくていいもの」

そんなにひどいのかと貴之が訊くと、「お父さん本人が申告に行ったら、生活保護^{ほご}の申請を勧められてたかも」という答えが返ってきたのだった。

貴之は父親の方に向き直った。

「なあ、そろそろ店を畳^{たた}んだ方がどうだ。この辺^{へん}の客は、今では駅前^{ていりゆうじょ}の商店街に行くだろ？ あの駅ができる前は、バスの停留所が近いってことで、この辺^{あた}りでも商売ができたけど、もう無理だ。諦めた方がいい」

雄治はゲンナリしたような顔で顎^{あご}をこす^{こす}った。

「店を畳んで、どうしろっていうんだ」

貴之はひと呼吸^{こきゅう}してからいった。「俺のところへ来^くればいい」

雄治の眉^{まゆ}が動いた。「何だと」

貴之が室内を見回した。壁のひび割れが目に入った。

「商売をやめるなら、こんな不便なところに住んでる必要はない。
俺たちと暮らそう。芙美子ふみこの了解もとってあるんだ。」

雄治は、ふんと鼻を鳴らした。「あの狭い部屋でか」

「いや、実は引っ越そうと思っているんだ。そろそろ家を買おうって話になってさ」

老眼鏡ろうがんきょうの向こうで雄治の目が大きくなった。「お前が？家を？」

「別におかしくないだろう。俺だって、もうすぐ四十だ。色々と物件ぶっけんを探しているところなんだ。それで、親父のことをどうしようって話にもなってさ」

雄治は顔を背そむけ、小さく手を振った。「わしのことは考えなくていい」

「どうして？」

「自分のことは自分で何とかする。お前たちの世話にはならん」

「そんなこと言ったって、無理なものは無理だろ。ろくに収入しゅうにゅうがなくて、どうやって生きていくっていうんだ」

「大きなお世話だ。何とかするといってるだろ」